

今回より新企画、連載書き下ろし小説を創刊します。ストーリーは戦時中に、少年時代を過ごした主人公が、敗戦によって変えられた人生を最後にどう完了させるか？という作品です。ぜひご期待下さい。

「我が人生思い残すことなし」(前編)

1. 空襲

昭和20年3月17日 神戸。ウー——！また突然空襲警報が鳴り響いた。これまで何度聞かされただろうか？その度に僕の意思は強固になっていった。つい、一週間前の3月10日にも、この米軍による東京への大空襲により、おびただしい犠牲者が出たばかりだ。「この戦争に絶対に勝つ！」それだけがこの不安に打ち勝つ唯一の支えだ。でも今度はいつもの家に居た夜とは違う。真昼間。しかもここは路面電車の中。この身ひとつで決まった防空壕へ走ることにはできない。母は座席に座ったまま僕をかばった。運転手に「ここを出ても同じです。爆弾はどこに落ちるか分かりません。死ぬ時はみんな一緒だから」と、言われたからだ。「ヒュー！」「ヒュー！」と弾が風を切っては「ドカーン！」といろんな方向から爆音が響いた。どうやら爆撃編隊の真下に居る様だった。「これまでかな？」僕は死を意識し、「これで死んだら名誉の戦死だ！」と満足感すら味わっていた。

何分。いや何十分そうしていたであろう？「昭男、行くで。」僕は母に背中を叩かれたので、ふと、現実に戻った。どうやら生きていたようだ。爆弾は僕の上には落ちて来なかったらしい。

爆音はすでに鳴り止み、B29の飛ぶ音もしない。ただ、窓の外に目を向けると至る所で火の手が上がり、建物はどれもこれも原形を留めておらず、ボロボロになった避難民がだんごの様になって逃げまどっていた。「早よ！出るで。」母に急かされ、運転手が開けてくれたドアから飛び降りた。



足元の陥没した道路や折れ曲った線路に注意を払いながら、母の後をついて行った。それでも足をとられ何度も転んだ。爆弾の直撃を受け体の半分を飛ばされた人。火に焼かれた真っ黒な死体。息絶え、無惨な姿が数多く横たわっていたからだ。僕は起き上がる度にこぼしに刃を入れた。悔しさで涙が流れた。絶対に許さない。何倍にもして仕返ししてやる。」「今に見てろ。あと4ヶ月、

15歳になって志願できたら必ず入隊する。」僕は涙で曇る母の後姿を見失うまいと必死で追いかけながら、何度も何度も自分に言い聞かせ、自分の人生の最終末を思い描き、決意を深めていた。(つづく)

